『世尊母伝承随順』による経典解釈の特徴[1]

庄司 史生

はじめに

本稿は，12 世紀の作とされる『世尊母の伝承に随順したものという解説』(*Jagaddalanivāsin, **Bhagavatyāmnāyānusāriṇī-nāma-vyākhyā*, 以下『世尊母伝承随順』）[2]における「三門十（一）異門」説の検討を通じて，同著による経典解釈の特徴を明らかにすることを目的とする．この『世尊母伝承随順』は『八千頌般若波羅蜜多〔経〕』（*Ārya-Aṣṭasāhasrikā-prajñāpāramitā*, 以下『八千頌般若』）に対する注釈書であり，チベット語訳のみが現存している．同論の注釈的立場については，それが『十万（頌）般若波羅蜜多広注』（**Śatasāhasrikāprajñāpāramitā-bṛhaṭṭīkā*, 以下『十万広注』）[3]と『聖十万（頌）二万五千（頌）一万八千（頌）般若波羅蜜多広注』(**Ārya-śatasāhasrikāpañcaviṃśatisāhasrikaṣṭādaśasāhasrikāprajñāpāramitā-bṛhaṭṭīkā*, 以下『三母広注』）[4]の説示（三門十一異門）[5]に基づくものであるとチベットにおいて伝承されていることが磯田熙文氏により指摘されている[6].

---

[1] 本稿は，平成 29 年 9 月 3 日（日）に花園大学で開催された日本印度学仏教学会第 68 回学術大会での口頭発表時の配布資料を改稿したものである．発表終了後，堀内俊郎先生より本稿について多くのご指摘，ご教示を賜りました．先生の学恩に感謝申し上げます.

[2] BRUNNHÖLZL はジャガッダラニヴァーシン（ジャガッダラに住むもの）について，トゥルプパ（Dol po pa, 1292-1361）やツォンカパ（Tsong kha pa, 1357-1419）がその名をシワ・ジュンネー（Zhi ba 'byung gnas; *Śāntasambhava/Śāntyākara）としていること，また同著が 1165 年の作品であると指摘している（BRUNNHÖLZL 2011）.

[3] テキスト自体には著者名表示なし.

[4] テキスト自体には著者名表示なし．なお『三母広注』はチョネ版・デルゲ版と，北京版・ナルタン版との間におけるヴァリアントの存在が指摘されている（磯田 1997）ことから，校訂テキスト作成の必要がある.

[5] 「八現観」説，「三門十一異門」説ともに，本来的に所依とする〈般若経〉は『二万五千頌般若』を中心とした大部の般若経（*Larger Prajñāpāramitā*）である（『大智度論』も同様である）.『八千頌般若』を中心とする小部の般若経（*Smaller Prajñāpāramitā*）ではない.

[6] 磯田 1994 を参照．また『十万広注』と『三母広注』には著者問題がある．両著はチベット語訳のみが現存している．両者には著者に関する奥書がなく，両著の著者性に関する議論がチベット仏教において展開されたこと（プトゥンやツォンカパ等）が既に指摘されている（磯田 1994/1996/1997 等）．中村法道氏は，OBERMILLER 1933 や谷口 2002 も踏まえた上で，インド仏教にお

Acta Tibetica et Buddhica 10: 37-54, 2017.
© Faculty of Buddhism, Minobusan University, JAPAN

なお,『現観荘厳論』(*Abhisamayālaṃkāra*) を,『八千頌般若』に再び組み入れて,両者を注解するという形式をとってインドにおいて造られた注釈書として,ハリバドラ(Haribhadra, 9 世紀頃)『聖八千(頌)般若波羅蜜多釈現観荘厳光明』(*Āryāṣṭasāhasrikā-prajñāpāramitāvyākhyānābhisamayālaṃkārālokā*, 以下『現観荘厳光明』),ラトナーカラシャーンティ(Ratnākaraśānti, 11 世紀頃)『聖八千(頌)般若波羅蜜多細疏最上心髄』(**Āryāṣṭasāhasrikā-prajñāpāramitāpañjikā-sārottamā*, 以下『最上心髄』),アバヤーカラグプタ(Abhayākaragupta, 11-12 世紀頃)『聖八千(頌)般若波羅蜜多注正處月光』(**Āryāṣṭasāhasrikāprajñāpāramitā-vṛtti-marmakaumudī*, 以下『正處月光』) が現存していることが知られ,これら三書による,特に『現観荘厳論』との関わりにおける,経典解釈の特徴については,既にパドマナーブ・ジャイニ氏,磯田熙文氏によって次のように指摘されている[7].

［表 1 『八千頌般若』注釈書による経典解釈の特徴①（磯田［1974］より）］

注釈書	解釈の特徴
ハリバドラ 『現観荘厳光明』	『現観荘厳論』所説の「八現観」説を『八千頌』に適用．両者間の不一致については指摘せず．
ラトナーカラシャーンティ 『最上心髄』	『八千頌』の本文に従って『現観』の偈文を改変．
アバヤーカラグプタ 『正處月光』	『現観』と『八千頌』とに不一致がある場合にも『現観』をそのままそこに対置．

これら三書は,本来『二万五千頌』系の〈般若経〉を「道」の観点からまとめた『現観荘厳論』の教理体系（八現観）の『八千頌』への適用,あるいはそれに対する批判を内容としている[8]．また,既に指摘されているように,この立場から「三母」という場合には,それらは『十万頌』・『二万五千頌』・『八千頌』を意味するものである．つまり,「三母」の内訳は「八現観」に基づく限りにおいて,『十万頌』・『二万五千頌』・『八千頌』を指し,「三門十一異門」説に基づく限り,「三母」の内訳は『十万頌』・『二万五千頌』・『一万八千頌』となる[9]．本稿で用いる『世尊母伝

いては両者の著者性に関する議論が行われていた形跡がないこと指摘している（NAKAMURA 2011）．本稿ではこれらの著者問題についてはふれない．

[7] 磯田 1974 に詳しい．なお磯田論文は JAINI 1972 に基づいた研究である．また,ハリバドラによる注釈方法については,鈴木健太 2003/2006 にさらに詳しい．

[8] ハリバドラ,ラトナーカラシャーンティ,アバヤーカラグプタが依拠する『八千頌般若』のテキストが,八現観を同経に適用させるために改変されたテキストであることは,すでに磯田 1994,庄司 2016b に指摘されている．

[9] 磯田 1997 を参照．

承随順』は，「三母」の三番目を『一万八千頌』とする「三門十一異門」説を，さらには『八千頌』に適用させて注釈するものである．

本稿では，『世尊母伝承随順』を用いて，本来『十万頌』・『二万五千頌』・『一万八千頌』に対する解釈方法である「三門十一異門」の『八千頌』への適用方法について検討し，同論における経典解釈の特徴を明らかにする．

１．（『十万広注』・）『三母広注』における「三門十一異門」説

「三門十一異門」説は『十万広注』と『三母広注』にて説示される．その概要については，既に磯田熙文氏により紹介されている[10]．ここでは先行研究に基づき，『三母広注』に示される同説の内容を概観する．

１．１　三門十一異門の概要

『三母広注』には，章（le'u）立てがなく，全 27 の巻（bam po）によって区分されている．「三門十一異門」説は，同著第 4 巻冒頭に次のように説示される．

> 四巻．「シャーリプトラよ，ここで，一切法のすべての相の現等覚を欲する菩薩摩訶薩は，般若波羅蜜を修習すべきである」[11]というのであり，この般若

---

[10] 磯田 1994/1996/1997 を参照．この他に加納和雄氏と中村法道氏は，『十万広注』と，チョムデンリクレルの著作集中の所説について紹介されている（加納＆中村 2009）．両氏による『十万広注』中の「三門十一異門説」に関する説明箇所を引用すると次の通りである．

「この般若波羅蜜に対する説明は，世尊が三門によって説示した．〔教えの〕初頭句のみに言及するだけで，〔教え全体を〕理解する者（mgo smos pas go ba），詳細な説明を通じて理解する者（rnam par spros nas go ba）と，教導によって導かれる者（drang dgos pa'i 'dul ba），という三種類の教化に始まり，〔各々〕簡略な説示の門・中位の説示の門・詳細な説示の門という三門と，十一異門によって説明された．そのうち十一異門とは先ず，一度のシャーリプトラへの教説と，五度のスブーティへの教説と，二度のカウシカへの教説と，二度の弥勒への教説，ダルモードガタ菩薩とサダープラルディタ菩薩の話に始まり，長老アーナンダにご垂示なさって伝えた一度〔の教説〕，以上が十一異門である」．以上の翻訳は加納＆中村 2009: 128 より．

ŚB: shes rab kyi pha rol tu phyin pa 'di bshad pa ni /{P om. /} bcom ldan 'das kyis sgo gsum gyis bstan te / mgo smos (D24a5) pas go ba dang / rnam par (P27b5) spros nas go ba dang / drang dgos pa'i 'dul ba dang /{P om. /} 'dul ba rnam pa gsum las brtsams te / mdor bstan pa'i sgo dang / 'bring du bstan pa'i sgo dang / rgyas par bstan pa'i sgo ste / sgo gsum dang (P27b6) rnam grangs bcu gcig gis (D24a6) bshad de / de la rnam grangs bcu gcig ni dang po shā ri'i bu la bka' stsal te bshad pa gcig dang / rab 'byor la bka' stsal te bshad pa lnga dang / brgya byin la bka' (P27b7) stsal te bshad pa gnyis dang / byams pa la bka' stsal te bshad pa gnyis dang / byang chub (D24a7) sems dpa'{*dpa'*: P *dpa'i*} chos 'phags dang{P ins. /} rtag tu ngu'i gtam glengs nas{P ins. /} gnas brtan kun dga' bo la (P27b8) bka' stsal te{P ins. /} yongs su gtad pa gcig dang{P ins. /} 'di dag ni rnam grangs bcu gcig go //{//: P /} (D24a4-7; P27b4-8).

[11] PVSP: sarvākāraṃ śāriputra sarvadharmān abhisaṃboddhukāmena bodhisattvena mahāsattvena prajñāpāramitāyāṃ yogaḥ karaṇīyaḥ (KIMURA 2007: 28.6-7).

波羅蜜の説示は，世尊が「三門と十一異門」（sgo gsum dang / rnam grangs bcu gcig）による説を立てたのである．この般若波羅蜜は略説により理解する〔所化〕（mgo smos pas go ba）と，詳細な説明により理解する〔所化〕（rnam par spros na go ba）と，教導によって導かれる所化（drang dgos pa'i 'dul ba）の 3 種に関して，［1］略説の門（mdor bstan pa'i sgo）と，［2］中説の門（'bring du bstan pa'i sgo）と，［3］広説の門（rgyas par bstan pa'i sgo）と三門により説かれたのである[12].

このように，「三門」とは，「略説」，「中説」，「広説」とからなる．次に，「三門」中の「略説」からはじめて「中説」，「広説」について説明する．

１．２　三門について

１）　三門の略説

このように，世尊による因縁の章（第 1 章）説示の次第，〔つまり〕偉大なはじまりによって説明の時が開かれ，法が説かれたために〔世尊は〕上座のシャーリプトラに対して，「シャーリプトラよ，ここで，一切法のすべての相の現等覚を欲する菩薩摩訶薩は，般若波羅蜜を修習すべきである」とおっしゃったのである．〔世尊は〕これだけ説かれて，何もおっしゃらなかった．それゆえに，これが略説の般若波羅蜜である，というのである[13].

２）　三門の中説

そのように世尊は何もおっしゃらず，上座のシャーリプトラによる詳細な説明によって理解するものたち（rnam par spros na go ba rnams）のための質問に

---

[12] ŚPAB: bam po bzhi pa / (P41a7) *shā ri'i bu{shā ri'i bu*: P *shā ra dva ti'i bu} 'di la byang chub sems dpa' sems dpa' chen po chos thams cad rnam pa thams cad du mngon par rdzogs par byang chub par 'dod pas shes rab kyi pha rol tu phyin pa la brtson par bya'o* zhes (D37b4) bya ba la / (P41a8) shes rab kyi pha rol tu phyin pa 'di bshad pa ni bcom ldan 'das kyis sgo gsum dang / rnam grangs bcu gcig gis bshad par rnam par gzhag{gzhag: P bzhag} ste / shes rab kyi pha rol tu phyin pa 'di ni mgo smos pas go ba dang / (P41b1) rnam par spros na go ba dang / drang dgos (D37b5) pa'i 'dul ba rnam pa gsum las brtsams te / [1] mdor bstan pa'i sgo dang / [2] 'bring du bstan pa'i sgo dang / [3] rgyas par bstan pa'i sgo dang sgo gsum gyis bshad do // (D37b3-5; P41a6-b1).

[13] ŚPAB: 'di (P41b2) ltar bcom ldan 'das kyis gleng gzhi'i le'u bstan pa'i rim pas brtsams pa chen (D37b6) pos bshad pa'i skabs phye ste chos bshad pa'i phyir gnas brtan shā ri'i bu la / *shā ri'i bu{shā ri'i bu*: P *shā ra dva ti'i bu} 'di la byang chub sems dpa' sems* (P41b3) *dpa' chen po chos thams cad rnam pa thams cad du mngon par rdzogs par byang chub par 'dod pas shes rab kyi pha rol tu phyin pa la* (D37b7) *brtson par bya'o* zhes bka' stsal to // der de tsam zhig bshad nas cang mi gsung bar (P41b4) gyur te / de bas na 'di ni [1] mdor bstan pa'i shes rab kyi pha rol tu phyin pa zhes bya'o // (D37b5-7; P41b1-4).

関して，中説の機会を開く世尊が，「一切法のすべての相の現等覚を欲する菩薩摩訶薩は，どのように般若波羅蜜を修習すべきであるのか」というのである．それから，世尊が略説の解説をもって，略説の通りに一切法を説いて，四種の行もまた説かれるのである．

次に，①何故修習すべきかと，②どのように修習すべきかと，③修習する人々の相が何であるかと，④修習する人々の区別と，⑤修習に対する教誡とは何であるかと，⑥修習の功徳とは何であるかと，⑦修習の区別とは何であるかと，⑧この説示の決定とは何であるかと，この八相が説かれたのである[14]．

このように，三門の中説は修習に関する八相の観点よりまとめられている．『三母広注』では以上に続けて，これら①～⑧までの八相について説明を付す[15]．それら八相をまとめると次の通りである．

［表２『三母広注』における「三門」中「略説の八相」の対応箇所[16]］

八相	『十万頌』	『二万五千頌』	『一万八千頌』
①修習すべき理由	2 章 (ka56a-100a)	2 章 (ka40a-58b)	2 章 (ka18b-33b)
②修習の方法	〃 (100a-114b)	〃 (58b-67a)	3-5 章 (34a-41b)
③修習する人々の相	〃 (115a-222a)	〃 (67a-83b)	〃 (41b-54b)
④修習する人々の区別	〃 (222a-272b)	〃 (84a-117b)	〃 (54b-85a)
⑤修習に対する教誡	3 章	3 章	6 章

[14] ŚPAB: de ltar bcom ldan 'das cang mi gsung bar gyur pa dang / gnas brtan shā ri'i bus rnam (D38a1) par spros na go ba rnams kyi don zhu ba (P41b5) brtsams nas 'bring du bstan pa'i skabs phye ba bcom ldan 'das byang chub sems dpa' sems dpa' chen po chos thams cad rnam pa thams cad du mngon par rdzogs par byang chub par 'tshal bas ji ltar (D38a2) shes rab kyi (P41b6) pha rol tu phyin pa la brtson par bgyi zhes gsol to // de nas bcom ldan 'das kyis mdor bstan pa'i bshad pa de nyid bzung ste / mdor bstan pa nyid du chos thams cad bstan nas spyod pa rnam pa bzhi yang bstan to //{*to* //: D *te* /} (P41b7) de'i 'og tu gang gi phyir brtson par bya ba (D38a3) dang / ji ltar brtson par bya ba dang / brtson par byed pa rnams kyi mtshan nyid gang yin pa dang / brtson par byed pa rnams kyi rab tu dbye (C38b3) ba dang / brtson pa la gdams pa gang yin pa dang / (P41b8) brtson pa'i phan yon gang yin pa dang / brtson pa'i rab tu dbye ba (D38a4) gang yin pa dang / bshad pa 'di'i gtan la dbab pa gang yin pa dang / rnam pa 'di brgyad bstan to // (D37b7-38a4; P41b4-8).

[15] ŚPAB: D38a4-39a4; P41b8-43a1.

[16] 表中の『十万頌』～『一万八千頌』は全て蔵訳（ラサ版）の所在であり，“ka”や“ga”は巻を表す．また，表中の八相のうち，①～④が「十一異門」中の「①舎利弗」，八相中の⑤～⑧が「十一異門」中の「②須菩提」にあたる．なお，蔵訳『二万五千頌』にはカンギュル所収本と，八現観に基づき経文に科文が挿入されたテンギュル所収本とがある．『三母広注』が用いるそれはカンギュル所収本である．

	(272b-430a)	(118a-159a)	(85b-102a)
⑥修習の功徳	4 章 (430a-460a)	4 章 (159a-171b)	7 章 (102a-110b)
⑦修習の区別	5-7 章 (460b-ga39b)	5-7 章 (171b-246a)	8-10 章 (110b-167a)
⑧修習の解説の決定	8-14 章冒頭 (39b-370a)	8-14 章冒頭 (246a-536b)	11-22 章冒頭 (167a-363b)

三門の中説の八相は以上のようにまとめることができ，『三母広注』は次のまとめを記して中説の説明を終える．

> このように，この次第によって，中説の般若波羅蜜が完了されたのである．この中説〔の般若波羅蜜〕もまた，一切相智性に関して，まさに無分別の般若波羅蜜をもって，勝義諦の方法で説かれたのである[17]．

中説は以上のようにまとめられている．中説は，三智（①一切相智性，②道智性，③一切智性）のうち，「一切相智性」の説示箇所にあたり，それは勝義諦の立場より説かれたものであるという．

3） 三門の広説

三門の広説は次のように説示される．

> 次に，この広説〔の般若波羅蜜〕は，菩薩の道の相智性〔＝道智性〕に関して，有分別（rnam par rtog pa dang bcas pa）と無分別の般若波羅蜜をもって，教導によるものたちのために世俗と勝義により，〔それら〕二つの相として広く説かれたのである．その次第がその次の機会から説かれるのである[18]．

---

[17] ŚPAB: de ltar rim pa 'dis shes rab kyi pha rol tu phyin pa 'bring du bshad pa yongs su rdzogs par byas so // 'bring du bstan pa 'di yang rnam pa thams cad mkhyen pa nyid las (P43a2) brtsams{D om. *brtsams*} te rnam par mi rtog pa'i shes rab kyi pha rol tu phyin pa nyid bzung nas (D39a5) don dam pa'i bden pa'i tshul du bshad do // (D39a4-5; P43a1-2).

[18] ŚPAB: de'i 'og tu rgyas par bshad pa 'di ni byang chub sems dpa'i lam gyi rnam pa shes pa nyid (P43a3) las brtsams te rnam par rtog pa dang bcas pa dang / rnam par mi rtog pa'i shes rab kyi pha rol tu phyin pa bzung nas drang dgos pa rnams (D39a6) kyi don du kun rdzob dang / don dam pa'i dbang gis rnam pa gnyis su rgyas (P43a4) par bshad do //{*do* //: *de* /} de'i go rims ni 'og nas de nyid kyi skabs nas bstan to // (D39a5-6; P43a2-4).

このように，三門の広説は，三智のうち，道智性の説示箇所以降が該当し，またそれは世俗諦と勝義諦の立場より説かれたものであるという．

１．３　十一異門について

次の十一異門とは，経典における説者の変更箇所を手掛かりとして，経典を解釈するものである．これは経典に十一の場面があると理解しているととらえることができる．

> それから，十一異門というのは，［1］最初のシャーリプトラへ教説されて説示されるのが第一の異門である．［2］次に上座のスブーティによる広説が第二である．［3］それから帝釈への教説と，［4］それから上座のスブーティと，［5］それから聖マイトレーヤと，［6］それから上座のスブーティと，［7］それから帝釈と，［8］それから上座のスブーティと，［9］それからマイトレーヤと，［10］それから上座のスブーティへ教説されて，［11］サダープラルディタと聖ダルモードゥガタの発言が〔なされ〕，また上座のアーナンダへ教説がなされてから，委嘱があり，これらが十一異門である[19]．

１．４　「三門」と「十一異門」のまとめ

以上のように，また既に指摘されているように[20]，「三門」とは般若波羅蜜を「略説・中説・広説」の三種により解釈する方法のことである．そのうち「略説」とは文字通り略説のみで理解する所化に対する説示であり，『十万頌』・『二万五千頌』・『一万八千頌』といった〈三母般若〉に共通する経文「シャーリプトラよ，ここで，一切法のすべての相の現等覚を欲する菩薩摩訶薩は，般若波羅蜜を修習すべきである」[21]がそれにあたる．「中説」とは詳細な説明により理解する所化に対する説示で

---

[19] ŚPAB: de nas{*nas*: P *la*} rnam grangs bcu gcig ces bya ba ni [1] dang por shā ri'i bu la bka' stsal te bshad pa ni rnam grangs gcig go //{//: P /} (D39a7) [2] de'i 'og tu gnas brtan (P43a5) rab 'byor gyis rgyas par bshad pa ni gnyis pa'o // [3] de nas rgya byin la bka' stsal pa dang / [4] de nas gnas brtan rab 'byor dang / [5] de nas 'phags pa byams pa dang / [6] de nas gnas brtan rab 'byor dang / (P43a6) [7] de nas brgya byin dang / (D39b1) [8] de nas gnas brtan rab 'byor dang / [9] de nas byams pa dang / [10] de nas gnas brtan rab 'byor la bka' stsal te / [11] rtag tu ngu dang / chos 'phags kyi gtam gyis yang gnas brtan (P43a7) kun dga' bo la bka' stsal nas yongs su gtad pa ste / 'di dag ni rnam grangs (D39b2) bcu gcig go //{//: P /} (D39a6-b2; P43a4-6).

[20] 磯田 1996 を参照．

[21] PVSP: sarvākāraṃ śāriputra sarvadharmān abhisaṃboddhukāmena bodhisattvena mahāsattvena prajñāpāramitāyāṃ yogaḥ karaṇīyaḥ (KIMURA 2007: 28.6-7).

あり，「略説」の上記経文中の「修習」を取り上げ，それを八つの相（①修習すべき理由，②修習の方法，③修習する人々の相，④修習する人々の区別，⑤修習に対する教誡，⑥修習の功徳，⑦修習の区別，⑧修習の説示の決定）により 2〜14 章冒頭部まで（『十万頌』・『二万五千頌』では 2〜14 章冒頭部，『一万八千頌』では 2〜22 章冒頭部に相応）全体にわたり説明するものである．「広説」とは 14 章（同上，『一万八千頌』は 22 章）以降，経典において帝釈が登場する場面以降における教説を指すものである．

また「十一異門」とは，『十万頌』・『二万五千頌』・『一万八千頌』といった〈三母般若〉に共通して説かれる経文を 11 の場面（①舎利弗，②須菩提，③帝釈，④須菩提，⑤弥勒，⑥須菩提，⑦帝釈，⑧須菩提，⑨弥勒，⑩須菩提，⑪常啼…阿難）に分け，説者が変わるこれら 11 の場面転換をもって大部の〈般若経〉全体を理解しようとするものである[22]．

以上の「三門」と「十一異門」とを対応させると次のようになる．

［図 1 （『十万広注』・）『三母広注』における「三門」と「十一異門」[23]］

三門	略説（第 2 章冒頭）	——	①舎利弗	十一異門
	中説「八相」（第 2〜14 章冒頭）	——	②須菩提	
	広説（第 14 章以降）	——	③帝釈〜⑪常啼…阿難	

なお，現存の『十万広注』は 53 章までの説明の途中で終わっており，全体として未完である．また『三母広注』はそのコロフォンに著者名は欠くものの，翻訳者のみは明記され，作品として一応完結したことになっている．しかしながら，「十一異門」に関すれば，最後の「⑪常啼…阿難」に対する注釈はそこに含まれていないことになる[24]．

２．『世尊母伝承随順』における「三門十異門」説

先述の通り，『世尊母伝承随順』が「三門十一異門」説に基づき『八千頌般若』を注釈したものであることは，チベットの伝承に従い，既に指摘されている[25]．ただし，同論が同説をどのように『八千頌般若』へと適用し注釈したのか，というこ

[22] なお，筆者は説者の転換箇所を手掛かりとして，『八千頌般若』の区分を行った（庄司 2016a）．
[23] 図中の章数の表記は『十万頌』と『二万五千頌』に基づく．
[24] 以上については，基本的に磯田 1996 に指摘されている．
[25] 磯田 1994 を参照．

とについては管見の限り明らかではない．本来『十万頌般若』,『二万五千頌般若』,『一万八千頌般若』に関する注釈方法である同説を,『世尊母伝承随順』はどのようにして『八千頌般若』へと適用したのであろうか.

以下に同論における同説に関する箇所の翻訳を示し，その内容を概観する.

２．１　三門十異門の概要

「どのように」とおっしゃった〔のはすなわち,〕「スブーティよ，菩薩摩訶薩らの般若波羅蜜に関して，菩薩摩訶薩らがどのように般若波羅蜜に出離するのか，あなたは明らかにするように」[26]というのであり，般若波羅蜜の説示の三つの門と十の異門がよく入った（rab tu 'jug pa）世尊によりたてられたのである．何故この般若波羅蜜は，まとめの門（略説の門）と中の門（中説の門）と広い門（広説の門）から，①略説により理解する〔所化〕と，②詳細な説明により理解する〔所化〕と，③言葉の説明により理解する所化という 3 種に関して，三つの門によって説かれ〔たかというと〕[27],

２．２　三門について

１）　三門の略説

すなわち，世尊は上座のスブーティに語ってから説示を任命し，沈黙した．まさにこれは，世尊によってまとめられた般若波羅蜜の説示であり，それ故にこれは略〔説〕の般若波羅蜜と言われるのである[28].

---

[26] ASP(Skt.): pratibhātu te Subhūte bodhisattvānāṃ mahāsattvānāṃ prajñāpāramitām ārabhya yathā bodhisattvā mahāsattvāḥ prajñāpāramitāṃ niryāyur iti | (VAIDYA 1960: 2.1-3; WOGIHARA 1932-35: 22.8-10).
ASP(Tib.): rab 'byor byang chub sems (P2a3) dpa' sems dpa' chen po rnams kyi shes rab kyi pha rol tu phyin pa las brtsams te / ji ltar byang chub sems dpa' (D2a2) sems dpa' chen po rnams / shes rab kyi pha rol tu phyin pa la nges par 'byung (P2a4) bar 'gyur ba de bzhin du khyod spobs par byos shig / (D2a1-2; P2a2-4).

[27] BhĀA: *ji ltar* zhes gsungs pa / *rab 'byor byang chub sems dpa' sems dpa' chen po rnams kyi shes rab kyi pha rol tu phyin pa las brtsams te* /{P om. /} *ji ltar byang chub sems dpa' sems dpa' chen* (P15b2) *po rnams shes rab kyi pha rol tu phyin pa la nges par 'byung bar 'gyur ba de bzhin* (D13b4) *du khyod spobs par byos shig* ces bya ba ste / shes rab kyi pha rol tu phyin pa'i bstan pa'i sgo gsum dang rnam grangs bcus rab tu 'jug (P15b3) pa bcom ldan 'das kyis zhes bya ba rnam par gzhag{*gzhag*: P *bzhag*} pa yin no // gang gi phyir shes rab kyi pha rol tu phyin pa 'di ni bsdus pa'i sgo dang bar (D13b5) ma'i sgo dang rgyas pa'i sgo nas mgo smos pa dang rnam par spros na go ba dang tshig la 'chel ba'i (P15b4) gdul bya gsum las brtsams nas sgo gsum rnams kyis bstan pa yin te / (D13b3-5; P15b2-4).

[28] BhĀA: 'di lta ste /{P om. /} bcom ldan 'das kyis gnas brtan rab 'byor la bka' stsal nas bstan pa'i don du nges par sbyar te (D13b6) cang mi gsung bar gyur to // (P15b5) 'di nyid ni bcom ldan 'das kyis bsdus pa shes rab kyi pha rol tu phyin pa bstan pa ste / de'i phyir 'di ni bsdus pa shes rab kyi pha rol tu phyin pa

2） 三門の中説

そして，上座のシャーリプトラが詳細な説明を通じて理解するもののために，「尊者スブーティは何…」[29]等によって，中間における機会〔の説（＝中説）〕がなされたのである．その故に，①出離の教誡と，②出離の功徳と，③出離の区別と，④またここでの出離の説示の決定，という四相が，上座と世尊によって説示されたのである[30]．

同論ではこの後，中説のこれら出離に関する四相（①出離の教誡，②出離の功徳，③出離の区別，④出離の説示の決定）に対する『八千頌般若』該当箇所を明示する[31]．詳細は省略するが，これら四相はすべて『八千頌般若』第 1 章内の経文に相応する．先の『三母広注』では「三門」の中説には「修習に八相あり」と説明していたが，ここでは「出離に四相あり」となり，両者の説示内容には相違がある．

3） 三門の広説

三門の広説については，次のように示される．

次に，広説である菩薩道の一切相智性（＝道智性）に関して，有分別と無分別の般若波羅蜜に関して，〔言葉により理解する〕所化たちのために世俗と勝義による二相によって広く〔解説〕したのであり，その次第は，まさに上〔述〕の基礎を説明するのである[32]．

---

zhes brjod do // (D13b5-6; P15b4-5).

[29] ASP(Skt.): *kim ayam āyuṣmān Subhūtiḥ* sthavira ātmīyena svakena prajñāpratibhāna-bal'ādhānena svakena prajñāpratibhāna-balâdhiṣṭhānena bodhisattvānāṃ mahāsattvānāṃ prajñāpāramitām upadekṣyaty ut'āho buddhânubhāvenêti || (VAIDYA 1960: 4-6; WOGIHARA 1932-35: 27.26-28.3).
ASP(Tib.): *ci tshe dang ldan pa rab 'byor 'di* bdag nyid kyi rang gi shes rab kyi spobs pa'i (D2a3) stobs bskyed (P2a5) pa dang / rang gi shes rab kyi spobs pa'i stobs byin gyis brlabs pas byang chub sems dpa' sems dpa' chen po rnams kyi shes rab kyi pha rol tu phyin pa nye bar ston par 'gyur ram / 'on te sangs (P2a6) rgyas kyi mthus yin snyam mo // (D2a2-3; P2a4-6).

[30] BhĀA: de nas gnas brtan shā ri'i bus rnam par spros pa na go ba rnams kyi (P15b6) don du / *ci tshe dang* (D13b7) *ldan pa rab 'byor 'di* zhes bya ba la sogs pas bar ma la gnas skabs byas pa'o // de'i phyir [1] nges par 'byung ba'i gdams ngag dang [2] nges par 'byung ba'i yon tan dang [3] nges par 'byung ba'i rab tu dbye ba dang (P15b7) [4] gang yang nges par 'byung ba bstan pa 'di la nges pa zhes bya ba rnam pa bzhis gnas (D14a1) brtan dang bcom ldan 'das kyis bshad pa yin no // (D13b6-14a1; P15b5-7).

[31] ASP(Tib.): D14a1-b1; P15b7-16b1.

[32] BhĀA: de'i 'og tu rgya cher rnam par bstan pa byang (D14b2) chub sems dpa' lam gyi rnam pa thams cad mkhyen pa nyid las (P16b2) brtsams te / rtog pa dang bcas pa dang rnam par mi rtog pa'i shes rab kyi pha rol tu phyin pa las brtsams nas gdul bya rnams kyi don du kun rdzob dang don dam pa'i dbang gis rnam pa gnyis kyis rgyas par byas pa yin (P16b3) te / (D14b3) de'i go rims ni gong du de nyid kyi gnas su

このように，「広説」について，ここでは詳細についてふれていないが，解釈方法の枠組み自体は『三母広注』等に示されたものを踏襲し，かつ実際の経文に従って説明を試みるものであることがわかる．

２．３　十異門について

次に，『十万広注』と『三母広注』では「十一異門」となっていたところが，『世尊母伝承随順』では次のように「十異門」となっている．

> そこで，十異門というのは，①〔世尊による〕スブーティへの教説をまとめたものが，第一異門である．それから次に②上座のスブーティによる説示というのが第二である．それから③〔世尊が〕帝釈への教説，そして④〔世尊が〕上座のスブーティと，それから⑤聖マイトレーヤと，⑥上座のスブーティと，それから⑦帝釈と，それから⑧上座のスブーティと，⑨まさに上座スブーティへの教説から，⑩サダープラルディタと聖ダルモードゥガタの発言により，さらに上座のアーナンダへ教説してから委嘱というのであり，このようにまず，『二万のパダッティ』（*nyi khri'i gzhung 'grel*）に随順して，経の次第を説き示す時に，すべてにおいて〔〈三母般若〉と『八千頌般若』を〕関連させたのである[33]．

以上のように，『三母広注』等においては「十一異門」であったものが『世尊母伝承随順』では「十異門」へと改変されている．

２．４　「三門」と「十異門」のまとめ

『世尊母伝承随順』における同説が，『三母広注』の説示を基礎としていることは

'chad par 'gyur ba yin no // (D14b1-3; P16b1-3).

[33] BhĀA: de la rnam grangs bcu ni [1] rab 'byor la bka' stsal nas bstan pa bsdus pa zhes bya ba ni rnam grangs gcig go //{//: P /} de nas phyis [2] gnas brtan rab (P16b4) 'byor gyis bstan pa zhes bya ba ni gnyis pa'o // de nas [3] brgya byin la bka' (D14b4) stsal nas de nas [4] gnas brtan rab 'byor dang / de nas [5] 'phags pa byams pa dang /{P om. /} de nas [6] gnas brtan rab 'byor dang /{P om. /} de nas [7] brgya byin (P16b5) dang /{P om. /} de nas [8] gnas brtan rab 'byor dang /{P om. /} de nas [9] gnas brtan rab 'byor nyid la bka' stsal nas [10] rtag tu ngu dang chos 'phags kyi gtam (D14b5) gyis slar gnas brtan kun dga' bo la bka' stsal nas yongs su gtod pa nyid ces bya (P16b6) ba ste / de ltar re zhig *nyi khri'i gzhung 'grel* gyi rjes su 'brangs nas mdo'i rim pa rjod par byed pa na thams cad la ltos nas byas pa yin no // (D14b3-5; P16b3-6).

すでに指摘されており，本稿においてもまた先述した．今回，同論における「三門十（一）異門」説について検討したところ，先行する『三母広注』と『世尊母伝承随順』との間において，「三門」中の「中説」の説示内容が若干相違していること，また『三母広注』では「十一異門」であるところが，『世尊母伝承随順』では「十異門」となっていることが明らかとなった．両者の比較考察は次項に譲るとして，ここで『世尊母伝承随順』における「三門」と「十異門」をまとめると次のようになる．

［図２『世尊母伝承随順』における「三門」と「十異門」］

三門	略説（第 1 章冒頭）	──	①須菩提	十異門
	中説「四相」（第 1 章）	──	②須菩提	
	広説（第 2 章以降）	──	③帝釈～⑩常啼…阿難	

このように，『世尊母伝承随順』における「三門十異門」説の枠組みは『三母広注』に依りながらも，実際には『八千頌』の経文に従ってその説明内容を改変していることがわかる．

３．『三母広注』と『世尊母伝承随順』における「三門十（一）異門」説の比較

ここで『世尊母伝承随順』における経典解釈の特徴を明らかにするために，『三母広注』と『世尊母伝承随順』における「三門」説と「十（一）異門」説を比較考察する．

３．１　「三門」説について

まず，「三門」説について，『三母広注』と『世尊母伝承随順』とを対比すると次の通りとなる．

［表３『三母広注』と『世尊母伝承随順』における「三門」説の対比[34]］

	『三母広注』	『世尊母伝承随順』
略説	経典第 2 章冒頭の句 （世尊→舎利弗）「シャーリプトラよ，ここで，一切法のすべての相の現等覚を欲する菩薩摩訶薩は，般若波羅蜜を修習すべきである」[35]	経典第 1 章冒頭の句 （世尊→須菩提）「スブーティよ，菩薩摩訶薩たちは般若波羅蜜にどのようにして出離するのであるかを明らかにするように」[36]
中説	「八相」（第 2～14 章冒頭部まで） ①修習すべき理由 ②修習の方法 ③修習する人々の相 ④修習する人々の区別 ⑤修習に対する教誡 ⑥修習の功徳 ⑦修習の区別 ⑧修習の説示の決定	「四相」（第 1 章内） ①出離の教誡 ②出離の功徳 ③出離の区別 ④出離の説示の決定
広説	第 14 章以降	第 2 章以降

このように，「三門」の場合，その「中説」はそれが前提とする「三門」の「略説」の経典の一文に対する説明となるはずであるが，その略説となる一文がそもそも『八千頌般若』には存在しない．そこで『世尊母伝承随順』は，それに相応するような一文を『八千頌』の経文中より見出し，その上で「中説」においてその説明を与えている．このような理由により，『三母広注』と『世尊母伝承随順』との間において，説明に相違が生じていると考えられる．

３．２　「十（一）異門」説について

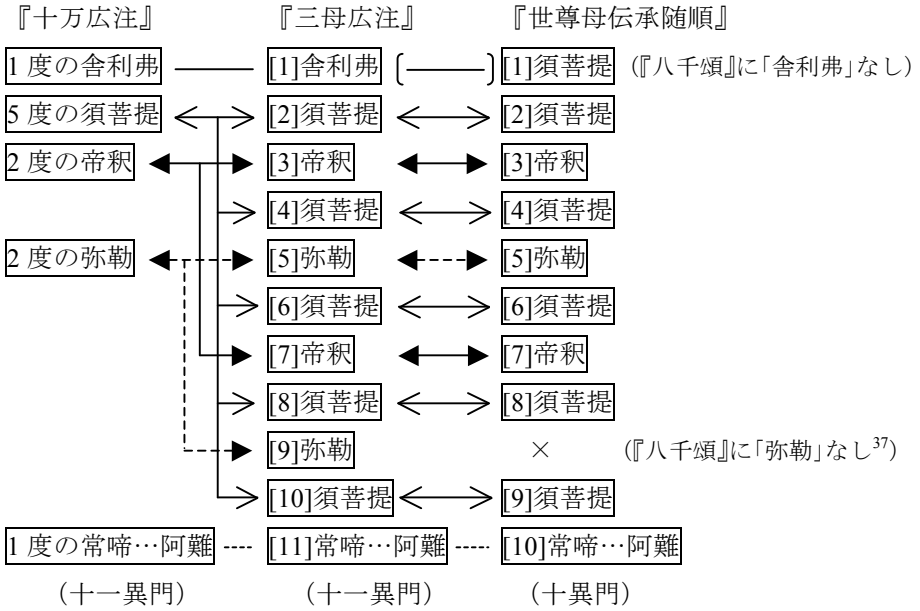
次に「十（一）異門」説について，『十万広注』，『三母広注』，『世尊母伝承随順』の三者を対比させると次のとおりとなる．

[34] 表中の『三母広注』については『二万五千頌』の章数を記す．

[35] PVSP: sarvākāraṃ śāriputra sarvadharmān abhisaṃboddhukāmena bodhisattvena mahāsattvena prajñāpāramitāyāṃ yogaḥ karaṇīyaḥ (KIMURA 2007: 28.6-7)

[36] ASP(Skt.): pratibhātu te Subhūte bodhisattvānāṃ mahāsattvānāṃ prajñāpāramitām ārabhya yathā bodhisattvā mahāsattvāḥ prajñāpāramitāṃ niryāyur iti | (VAIDYA 1960: 2.1-3; WOGIHARA 1932-35: 22. 8-10)

［図３『十万広注』・『三母広注』・『世尊母伝承随順』における「十（一）異門」説の対比］



このように，「十（一）異門」説について，本来「十一異門」であるものを，『世尊母伝承随順』は「十異門」説へと変更していることがわかる．その意図は，先の「三門」説と同様であろう．つまり，『三母広注』による解釈方法を踏まえながらも，『八千頌』に対応経文が存在しない場合には，解釈方法の枠組みのみを踏襲し，詳細な説明内容は，経文に従って改変をしていることになる．

なお，『十万広注』は第 53 章までの注釈で終わることから作品として未完であり，『三母広注』もまた「十一異門」説を例とすれば，最後の注釈まではなさずに作品が終わっていることなる．これに対して『世尊母伝承随順』は，『八千頌般若』全体にわたる注釈を終えている．

37 『三母広注』の［9］弥勒が『世尊母伝承随順』に欠けている．これは，所謂「弥勒章」を指すものと推定される．「弥勒章」が挿入されている〈般若経〉は『二万五千頌』と『一万八千頌』であり，『八千頌』や『十万頌』にはない．『十万広注』の「十一異門」には「弥勒」があるが，実際のところ，『十万広注』はそれ以前の箇所で注釈を終えており，この点から同論は未完であるといえる．

4　まとめ

本稿で確認したように，『世尊母伝承随順』は，先行する『十万広注』や『三母広注』に説かれる「三門十一異門」説を，『八千頌般若』に適用させた上で注釈するものであるが，経文との不一致が認められる場合，経文は決して改変せずに「三門十一異門」説の内容を経文にあわせて改変させた上で注釈している．

また，『十万広注』は未完，『三母広注』もおそらく未完であるのに対して，『世尊母伝承随順』は経典全体にわたる注釈を終えている．このことから「三門十（一）異門」説による〈般若経〉解釈の伝承は，『世尊母伝承随順』をもって完結したといえるかもしれない．

さらに，「八現観」の体系を説示内容とする『現観荘厳論』を『八千頌般若』に適用させる際に経文改変が行われたことが既に指摘されているが[38]，「三門十（一）異門」の教理体系を承ける『世尊母伝承随順』は，経文の改変は一切行わず，「三門十（一）異門」説の内容を改変することで，両者間の不一致を処理していることがわかる．

最後に，本稿冒頭で示した［表１『八千頌般若』注釈書による経典解釈の特徴］に，『世尊母伝承随順』による経典解釈の特徴を追記（太枠部分）すると次の通りである．

［表４『八千頌般若』注釈書による経典解釈の特徴②[39]］

注釈書	解釈の特徴	備考
ハリバドラ 『現観荘厳光明』	『現観荘厳論』所説の「八現観」説を『八千頌』に適用．両者間の内容の不一致については指摘せず．	八現観
ラトナーカラシャーンティ 『最上心髄』	『八千頌』の経文に従って『現観』の偈文を改変．	
アバヤーカラグプタ 『正處月光』	『現観』と『八千頌』とに不一致がある場合にも『現観』をそのままそこに対置．	
ジャガッダラに住むもの 『世尊母伝承随順』	『三母広注』所説の「三門十一異門」説を『八千頌』に適用．両者に不一致が認められる場合，『八千頌』の経文に従って「十一異門」説を「十門」説に改変．	三門 十(一)異門

[38] 磯田 1994，庄司 2016b を参照．

[39] 本稿冒頭の［表１『八千頌般若』注釈書による経典解釈の特徴①］の改訂版．ハリバドラからアバヤーカラグプタまでについては，磯田 1974 に指摘済みである．

略号と文献

1. 一次文献

『十万頌』(ŚSP):『十万頌般若波羅蜜多〔経〕』(*Śatasāhasrikā-prajñāpāramitā*, *shes rab kyi pha rol tu phyin pa stong phrag brgya pa*, D no.8; P no.730)

『二万五千頌』(PVSP):『二万五千頌般若波羅蜜多〔経〕』(*Pañcaviṃśatisāhasrikā-prajñāpāramitā*, *shes rab kyi pha rol tu phyin pa stong phrag nyi shu lnga pa*, D no.9; P no.731) Skt. text = KIMURA 2007

『一万八千頌』(ADSP):『一万八千頌般若波羅蜜多〔経〕』(**Ārya-Aṣṭādaśasāhasrikā-prajñāpāramitā-nāma-mahāyāna-sūtra*, *'phags pa shes rab kyi pha rol tu phyin pa khri brgyad stong pa zhes bya ba theg pa chen po'i mdo*, D no.10; P no.732)

『八千頌』(ASP):『八千頌般若波羅蜜多〔経〕』(*Ārya-Aṣṭasāhasrikā-prajñāpāramitā*, *'phags pa shes rab kyi pha rol tu phyin pa brgyad stong pa*, D no.12; P no.734) Skt. text = VAIDYA 1960, WOGIHARA 1932-35

『十万広注』(ŚB):『十万(頌)般若波羅蜜多広注』(**Śatasāhasrikāprajñāpāramitā-bṛhaṭṭīkā*, *shes rab kyi pha rol tu phyin pa 'bum pa'i rgya cher 'grel pa*, D no.3807; P no.5205)

『三母広注』(ŚPAB):『聖十万(頌)二万五千(頌)一万八千(頌)般若波羅蜜多広注』(**Ārya-śatasāhasrikāpañcaviṃśatisāhasrikāṣṭādaśasāhasrikāprajñāpāramitā-bṛhaṭṭīkā*, *'phags pa shes rab kyi pha rol tu phyin pa 'bum pa dang nyi khri lnga stong pa dang khri brgyad stong pa'i rgya cher bshad pa*, D no.3808; P no.5206)

『現観荘厳光明』(AAĀ):ハリバドラ『聖八千(頌)般若波羅蜜多釈現観荘厳光明』(Haribhadra, *Āryāṣṭasāhasrikāprajñāpāramitāvyākhyānābhisamayālaṃkārāloka*, *'phags pa shes rab kyi pha rol tu phyin pa brgyad stong pa'i bshad pa mngon par rtogs pa'i rgyan gyi snang ba*, D no.3791; P no.5189)

『最上心髄』(SU):ラトナーカラシャーンティ『聖八千(頌)般若波羅蜜多細疏最上心髄』(Ratnākaraśānti, **Āryāṣṭasāhasrikāprajñāpāramitāpañjikā-sārottamā*, *'phags pa shes rab kyi pha rol tu phyin pa brgyad stong pa'i dka' 'grel snying po mchog*, D no.3803; P no.5200)

『正処月光』(MK):アバヤーカラグプタ『聖八千(頌)般若波羅蜜多注正處月光』(Abhayākaragupta, **Āryāṣṭasāhasrikāprajñāpāramitāvṛtti-marmakaumudī*, *'phags pa shes rab kyi pha rol tu phyin pa brgyad stong pa'i 'grel pa gnad kyi zla ba'i 'od*, D no.3805; P no.5202)

『世尊母伝承随順』（BhĀA）：ジャガッダラに住むもの（著）『世尊母の伝承に随順したものという解説』（*Jagaddalanivāsin, **Bhagavatyāmnāyānusāriṇī-nāma-vyākhyā*, *bcom ldan 'das ma'i man ngag gi rjes su 'brang ba zhes bya ba'i rnam par bshad pa*, D no.3811; P no.5209）

2. 二次文献

a. 和文

磯田熙文. 1974.「Abhisamaya と Aṣṭasāhasrikā」『宗教研究』218, pp.95-97.

磯田熙文. 1994.「『Āmnāyānusāriṇī』における十六空性説について」『日本仏教学会年報』59, pp.37-50.

磯田熙文. 1996.「『十万般若広注』と『三母広注』」『勝呂信靜博士古稀記念論文集』東京：山喜房佛書林, pp.(17)-(29).

磯田熙文. 1997.「三母と Abhisamayālaṃkāra」『印度學佛教學研究』46(1), pp. (156)-(161).

加納和雄＆中村法道. 2009.「チョムデンリクレル著『弥勒法の歴史』―テクストと和訳」Acta Tibetica et Buddhica, 2, pp.117-139.

庄司史生. 2016a.『ロンドン写本カンギュル所収チベット語訳『八千頌般若』の研究』（Bibliotheca Tibetica et Buddhica, vol.1）東京：山喜房佛書林.

庄司史生. 2016b.『八千頌般若経の形成史的研究』（立正大学大学院文学研究科研究叢書）東京：山喜房佛書林.

鈴木健太. 2003.「『般若経』における正性に確定した者の発心をめぐって―『般若経』諸註釈書の解釈法について―」『インド哲学仏教学研究』10, pp.32-45, 91-92.

鈴木健太. 2006.「Haribhadra の『八千頌』解釈の諸特徴」『東洋文化研究所報』149, pp.129-164.

谷口富士夫. 2002.『現観体験の研究』東京：山喜房佛書林.

b. 欧文

BRUNNHÖLZL, Karl. 2011. *Prajñāpāramitā, Indian "gzhan stong pas", and the beginning of Tibetan gzhan stong*, Wiener Studien zur Tibetologie und Buddhismuskunde, Heft 74, Wien: Universität Wien.

JAINI, Padmabh. S. 1972. “The Ālokā of Haribhadra and the Saratamā of Ratnākaraśānti,” *BSOAS*, vol.35, part 2. pp.271-284.

KIMURA, Takayasu. 2007. *Pañcaviṃśatisāhasrikā Prajñāpāramitā I-1*. Tokyo: Sankibo

Busshorin.

NAKAMURA, Hodo. 2011. "Traditions of the commentaries ascribed to Asaṅga and Vasubandhu on the Abhisamayālaṃkāra: relationship with the commentaries ascribed to Daṃṣṭrasena on the Prajñāpāramitā-literature," *Journal of Indian and Buddhist studies*, 59(3), pp.1262-1266.

OBERMILLER, Eugéne. 1933. "The doctrine of Prajñāpāramitā as exposed in the Abhisamayālaṃkāra of Maitreya," *Acta Orientalia*, vol.11, pp.1-133, 334-354.

VAIDYA, Paraśurāma Lakṣmaṇa (ed.). 1960. *Aṣṭasāhasrikā Prajñāpāramitā*, Dharbhanga: The Mithila Institute of Post-Graduate Studies and Research in Sanskrit Learning.

WOGIHARA, Unrai (ed.). 1932-35. *Abhisamayālṃkārālokā Prajñāpāramitāvyākhyā*, Tokyo: Tōyō Bunko.